

# 学生主体の双方向授業づくり

杉 江 修 治

## 1 学生主体の双方向授業とは

大学の授業改善のポイントの一つに、双方向授業がある。教員が一方的に講義をするのではなく、学生からの反応を頻繁に引き出す、学生の主体的参加が可能な授業が望ましいと考えられてきている。

人は、基本的には本人からの外界への主体的働きかけによってさまざまな行動を獲得してきたというのが、学習心理学によって得られた知見である。学習過程に学習者の主体性を保障することは原理として正しい。ただ、組織的な学習機会である学校の教科教育では、その内容に応じて学習者の学習へのかかわらせ方について、指導者の工夫が必要になる。知識技能の直接的習得を目標とする科目もあろうし、さまざまな情報を元に態度を形づくることが目標である科目もあろう。内容に応じて双方向的な活動をいつ、どのように入れていくかは、授業を設計し、学生の学習を援助するよりよい条件づくりをする者としての教員の意思決定に任されることである。

この報告は、教師と学生間の相互作用に加えて、学生間の相互作用の機会をより十分に保障した授業工夫を内容とする。科目は文学部心理学科の専門科目「教育心理学」である。学部段階の「教育心理学」は、そのさまざまな研究成果を方法論とあわせて理解し、学生自身の問題意識を高めるところに指導の目標がある。研究領域は、教育という現実的な対応が要求される場であり、学生同士の双方向の話し合いによる情報交換が、知識の構造的、合理的内面化に役立つものとなると考えられるのである。

筆者は、授業設計に際しては、「参加」「協同」「成就」という3つの要素が不可欠であるとのべてきている(杉江 1999)。いずれも学習者の学習への動機づけを高める工夫である。

「参加」には、実験等のように学習過程に動作を入れる「体の参加」と、知的興味関心をかきたてるような導入の工夫や講義内容の工夫による「頭の参加」がある。双方向授業はこの2つの形の「参加」をともに高める工夫となる。

「協同」は、学習者集団の成員全員がともに高め合おうという目標の元に学習するという事態を言う。協同は競争に比べて学習への動機づけをより高め、集団成員に直接的な習得にとどまらず多様な同時学習をもたらす目標構造であり、近年諸外国でも学習指導の原理として注目を集めてきている。さまざまな協同学習の手法が工夫されてきているのである(Johnson, D. W., Johnson, R. T., & Holubec, E. J. 1990)。双方向授業を行なうに際しては、単に意見交換をするだけでなく、学習者がともに伸びようという共通の意識づけをすることが必要となる。ともに伸びるための有力な接近として、切磋琢磨がある。磨き合うその過程は論争のような競争的色合いが強いが、その結果は双方にプラスとなるのであり、結局は協同の範疇のことがらと考えられるのである。

「成就」は学習の手応えを知ることを言う。双方向授業の過程は、さまざまな意見が受け入れられたり批判されたりする過程である。そのような過程を経験することで、学習者は自身の理解度や、意見・態度の水準をおのづから理解していくことになる。また、授業の進展とともに高まっていく議論は、参加した者全員が共有できる手応えとなり、各自が自己充足感を高め、満足度を高めるのである。

以下に報告する実践の特徴は次のとおりである。

- ① 学生に授業をさせる。ゼミなどでは学生をレポーターとして報告させる授業はよくみかけられる。しかしここでは自分の学んだことを一方的に報告するのではなく、他の学生に理解されるように授業として工夫することを求める。
- ② 授業過程では、レポーターの一方的な講義にならないよう、フロアの学生の参加を求めるためのさまざまな工夫を要求する。そのための

事前指導を行なう。

- ③ 毎回の授業の内容について、学生によるまとめを次週に出させる。それは、授業を学生がどう受けとめ、何を学んだかに関する情報として教員に役立ち、学生には学習内容の確認に役立つものである。

## 2 どのような実践工夫か

### (1) 概 要

(ア) 授業の構成 教育心理学は通年の科目である。その内前期は、筆者の講義による教育心理学概論を行なう。そこでの授業は「学習課題明示方式」(杉江 1993)によった。学生の「頭の参加」を促す方式である。授業の目標としては、いわゆる教育心理学的な知識の個別的習得ではなく、家庭教育と学校教育との強い関連性をもつ内容に絞り込み、現実の問題に対応することのできる実証的原理に注目させ、その理解を図ることを狙った。

ここで報告する実践は後期のものである。後期は学生による主体的な双方向授業を通して、前期で学んだ内容が現実の問題を捉え、対応を考える上でどのように意義あるものかを点検し確認することを授業のねらいとした。

受講生は2～4年生。46人。

(イ) ガイダンスとグルーピング 後期授業第1時間目は授業の進め方についてのガイダンスと授業担当者のグループづくりを行なう。「授業の進め方」として、次の内容を記した資料を配り、解説した。

- ① 次のテーマを2人で分担し、レポートする。発表要旨はB4用紙を用いる。枚数自由。

要旨は授業開始15分前までに(できれば前日に)杉江研究室にもってくる。その後印刷する。間に合わないときは自費で47部印刷する。なお、レポートは教科書のような重要な教材であるという観点から作成すること。

- ② レポーターの持ち時間は2人で45分。残りを質疑の時間とする。  
③ 毎週、レポーター以外に「記者」をひとり作る。「記者」は、自分が

取材した時間の「ニュース」を書き、次回に配布する。印刷するため、授業時間15分前に（できれば前日に）杉江研究室にもってくる。

- ④ レポートに必要な資料は各自で探すことが原則だが、適切なものがあれば杉江が貸し出す（返却はすみやかに）。
- ⑤ レポーターが欠席した場合は休講とする。
- ⑥ なお、興味あるテーマがある場合はそれを選んで良いので申し出るように。

グルーピングは籤によった。1998年度は受講生46人の内20人がレポーターに、10人が記者になった。学年は2年生から4年生までの混成となった。レポーターと記者を合わせて3人グループとし、授業計画は共同して取り組ませた。

(ウ) **学習課題** 次の10テーマを設定した。

遊び／家庭／学級／教師／部活／教科書／塾／地域／マスコミ／早教育。

各グループのテーマ選びは希望によった。希望が重複したテーマについては話し合いで調整した。

実際には、「地域」から「学級崩壊」へ、「教科書」から「子どもの夢」へとテーマ変更をしたグループがあった。また、関心を絞り込み、「家庭」では「アダルトチルドレン」に、「学級」では「いじめ」に問題を限定するという事例もみられた。

## (2) 1時間の流れ

(ア) **事前指導** 毎時授業終了後、次回の担当グループを残し、次時の授業づくりのための指導を短時間で行なった。その内容は次のとおりである。

- ① そのグループの問題意識を確認し、授業可能であるかどうかを診断する。関心が広がりすぎていた場合は絞り込みを行なう。
- ② 問題意識にそった資料の提供（あらかじめいくつかの資料を用意し、適切なものを貸与する）、または所在について情報を与える。
- ③ フロアの学生を参加させるための技法を教授する。留意点としては、発言しやすい発問の仕方（限定的に、明確に問うこと）、グループ

学習を入れるタイミング、テーマによってはディベートの導入、レジメの書き方などがあった。

(イ) **1時間の流れ** 授業は教壇に立った学生によってはじめられる。だれが教員の役割をするかはそれぞれのグループの判断に任されたが、多くは前半と後半で分担した。レジメと資料が配布される。双方向性を意識した授業過程をとったのち終了。その後残った時間（学生の議論に時間が長く、数分程度しか残らないという場合が大多数であった）で教員が授業過程に即したまとめを行なう。

### (3) 授業の事例

(ア) **事例1「遊び」** この授業は学生による第1回目の授業であり、比較的オーソドックスな流れで進められた。レジメ1枚と遊びに関する調査資料2枚が配布された。前半はレポーターによる遊びの定義とその発達の意義の確認を行い、後半は遊びの変化を親の世代と比較し、変化の生じた理由と、変化が子どもの発達にもたらす影響の可能性を扱った。後半部分は、フロアからの意見を広く聴取する問答形式で授業が進められた。レポーターは前半と後半で交替し、空いた者は板書を担当した。次週の「ニュース」（「友の会会報」と名付けられたが）では、話し合いの内容の要約と教員のまとめ（まとめがそのように理解されたのかという情報として教員に有効である）、最後に記者の感想が書かれた。授業の後、子どもたちの遊びの様子に目が行くようになり、そこでさまざまな学習がなされていることを実感的に感じたという趣旨のものであった。

(イ) **事例2「学級」** この授業ではNHKが取材、放映した「学級崩壊」の番組ビデオをレポーターが捜し出し、はじめに全員で視聴した。視聴に先立って次のような表現で課題が出された。

「ここ数年、学級崩壊という現象が深刻な問題となってきた。学級崩壊は、その名のとおり学校の教室内で起こる現象である。しかしながら、学級崩壊は、果たして学校という組織の中だけの問題なのだろうか。今回は、学級崩壊の現状をビデオでみていただき、学級崩壊が起こる背景にはいったい何があるのか考えていただきたい。また、以下の立場に立ったとき、自分だったらどのように感じ、考えるかということ念頭に入れなが

らご覧いただきたい。

自分が子どもだったら／自分が教師だったら／自分が親だったら／自分の学区内の学校だったら」

その後、原因と解決策について意見交換を求める形で授業が進められた。また、授業の最後に次週のテーマ「マスコミ」に関するアンケート調査を行なった。次週レポーターとの連携が行なわれたのである。

次週出された「ニュース」は、授業中での討議を、先に示した課題にそって整理した内容のものであった。さらに、授業の中で出された学級崩壊に対する保護者の意見を知りたいというフロアからの要望に応じて、インターネットで探し出した情報を付録として付けたのである。

(ウ) **事例3「部活」** この授業ではまず教育課程における部活の位置づけ、参加実態について、調査データに基づきを準備して解説する。さらに指導事例についても資料を準備し、解説を施した。その後、座席位置で受講者を半々に分け、学校部活に賛成か反対かという題でディベートを行なった。意見交換は活発であった。次週のニュースでは、ディベートで出されたさまざまな賛否の理由があげられ、この問題への認識の広がりをも明確にしたのである。

(エ) **その他の事例** 回を重ねるに従い、学生の方からさまざまな主体的試みが出されるようになっていった。「早教育」では名古屋市内にある早教育教室「プラトンスクール」や「河合塾ドルトンスクール」などのパンフレットを集めて資料としたり、「塾」では、授業開始時に受講生の通塾経験を調査しておき、座席位置を決めて、司会のとり回しをしやすくしたり、受講者に授業の最後に通塾経験のアンケートをとり、次週の「ニュース」に結果を掲載したり、というような活動をもみることができたのである。それらは教員の事前指導をこえた試みであった。

#### (4) 教員の指導の留意点

学生主導の授業過程では、教員は放任的リーダーとして振る舞えば良いわけではない。この形の授業は、学生の反応に心を配りながら進めていく講義と同様に実際非常に疲れるものである。

学生の準備してくる授業の構成は、その場でなければ分からない。その

流れをつかみ、学生の講義部分に誤りはないか、要素的な思考に陥っていないかなどに気をつけ、時に応じて発言する(最小限に押さえる必要があるが)。さらにユニークな視点やすぐれた考察についてメモをしておき、後のまとめの際に役立てる。さらに、講義の流れをスムーズにしたり、ステップを明確化するための質問をする(これも最小限に止める必要がある)。

レポーターからフロアの学生に対する発問は、事前の指導をしても、漠然とした形であることが多い。どのような回答を求めているのか、明らかに戸惑いがあると感じられる場合は発問の趣旨を確認したり、言い換えをしたりして援助する。また、回答についても趣旨があいまいなものは確認を求め、次の議論の材料になる形にしておく。

なお、授業中の教員の発言では、学生を批判する内容は一切しない。基本的に良いところをみつけることに努め、一貫して受容的な態度で接する。学生同士で話を進めているのだという雰囲気を作るようにすべきである。学生によっては一つひとつの発言ごとに教師の顔をうかがう者もいるが、基本的には首肯返し、不安を除くよう試みるべきだろう。

以上の配慮に加え、最後の数分のまとめのために、それぞれの授業内容に沿った要旨を短時間で作っておく。その中で、先にメモした内容、すなわち押さえておくべきことから抜け落ちている部分の解説やレポーターの講義の中ですぐれた着眼などを入れ込むようにする。とりわけレポーターやフロアの発言のポジティブな側面をまとめに取り入れていくことは、学生の受講意欲を高めるのに役立つと思われる。ただ、教員に残される時間の長さは不定であり(5～20分位の範囲であるが)、時間調整のための緊張もある。

なお、毎回、それぞれの課題についての認識を深め、問題意識を高めるのに役立つと考える資料を、教員からも配布した。

事前指導に際しては、学生参加の指導技法をある程度教員が知っておく必要がある。当初は学生はそのアドバイスを踏襲することが多いが、比較的早くからさらに工夫を自主的に加えていくようになり、教員の方も学ぶところが大きくなる。

毎回出させる「ニュース」であるが、それをおもしろい読み物にするた

めの仕掛けも必要である。お座成りなものにならないために、今回は前年度の「ニュース」からレイアウトの良いもの、内容の充実したものをモデルとしてガイダンス時に配布した。その結果イラストがたくさん入れられ、読み物としても楽しく、発行者自身も楽しんで作っていると感じられる「ニュース」が多くを占めることとなった。

### (5) 評 価

(ア) 授業への参加 46名の受講者の中で年間に脱落した者は2名であった。出席は第1回目は40名(87%)、第6回目は42名(91%)、第12回目は40名(87%)と一貫して高率であった。学生の受講態度は総じて意欲的な印象であり、発言も比較的積極的になされた。指名されない自発的発言が毎回多くみられたのである。

参加度は、毎回のレポートの質においてもうかがうことができた。教員は直前の週に事前指導を行なうのだが、多くのグループはすでに問題の方向づけができており、資料収集もはじめていた。当日配布の資料も数枚におよび、努力が認められるものであった。

(イ) 内容の習得 単位認定は「教育心理学：こんな研究が必要：テーマと問題意識、研究計画」という題のレポートと出席点（主体的学習経験も目標と考えるため）で行なった。問題意識の展開は興味深い内容のものが多かったが、研究計画というところにまで踏み込んだ題であったため、学生にとっては困難度が高かったようであり、レポートでは8割以上の点数を与えることのできた者は10人(22%)であった。

(ウ) その他 レポーターまたは記者を経験した者と経験しなかった者とは、参加の公平性で差があることになる。そこで、この授業では、役割のなかった者は「特番記者」として最後の時間までに「ニュース」を1回は発行するという課題を与えた。これは第1時に指示した。テーマは授業で触発されたもの、自身の問題意識からなど、多様なもので良いという指示の元で選ばれた。授業の後半に徐々に提出された。授業で扱ったテーマ以外に、競争教育の問題、環境と子ども、読書行動、不登校、子ども文化、ストレス、児童虐待、スクール・カウンセリングなどがとりあげられた。



### 3 成果と課題

#### (1) 成 果

この方式では、学生の積極的な授業参加がなされたというところに大きな成果があると考えられる。出席率の高さ、授業過程での自発的発言、授業後の学生の個人的感想、レポートの内容の広がりにもみられる積極的準備、楽しんで書かれている「ニュース」などが、積極的参加を示す指標である。

また、教育問題を中心とした授業内容では、学生自身のこれまでの生活経験、学校体験を振り返る機会となる。レポーターからの発問も経験に関する意見を求める場合が多く、受講者は自身の発達過程を振り返る機会となった。さらに、相当プライベートな内容についても気軽に開陳する発言が早くから出はじめ、40人をこえるクラスサイズでありながら、自由な発言のできる準拠集団的雰囲気形成されたのも興味深い現象であった。自身を開くことの少ない現代の大学生にとって、貴重な同時学習がなされる場になったのではないかと思われる。

教育心理学の内容の習得については、適切にそれに応じた評価を行なわなかった。知識的な側面は用いた教科書に十分手がかりがあるからである。単位認定のために提出を求めたレポートでは、学生それぞれの関心にそって、長文にわたる問題意識を書いたものが多くみられた。残念ながら前期の学習内容との有機的な結びつきをうかがわせるものは少なかったが、具体的に研究を進める際には関連づけがなされるであろうと考えている。

#### (2) 課 題

学生のほとんどは人前で話すという経験がないという。当初尻込みをみせた彼らであったが、いざはじまるとその懸念は不要となった。彼らが話しやすい環境を醸成することが教員の重要な仕事であると感じたのである。学生は仲間とともに学ぶという形態を明らかに好む。高校で学習に失望してきている学生に、学び方の本来の姿を体験させることは意義あるこ

とといえよう。

なお、このような形態は、系統性が重要となる科目では導入しにくい。この実践でも、前期は教員の講義を行い、系統的な学習をしたのち学生に任せる授業に入っている。教育目標に応じた指導法の組合せを考えることが大切である。

この実践ではしかし、前半の教育心理学の原理が、実際の教育課題の理解や対応策の検討で十分に生きなかったことが課題として残った。学生は議論の過程で教育心理学の原理の適用という発想をあまり持っていなかった可能性がある。この辺りへの教員の働きかけについて工夫の余地がある。

#### 文 献

- Johnson, D. W., Johnson, R. T., & Holubec, E. J. 1993 *Ciecles of Learning*. Interaction Book Company. (杉江修治・石田裕久・伊藤康児・伊藤篤訳  
1998 学習の輪 二瓶社)
- 杉江修治 1993 学習課題明示方式による講義改善の試み 大学と教育 8, 4-14.
- 杉江修治 1999 バズ学習の研究 風間書房